

---

# めえる

まこちん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

めえる

### 【コード】

N6636D

### 【作者名】

まこちゃん

### 【あらすじ】

恋に疲れた女と恋を禁じた男の末にあるものは…

## 第一話

「はじめまして。

お会いするのは止めましょう。

僕は総じて容姿を褒められた事はないし、おそらく貴女は醜女と言われているでしょう。

会ったこともない貴女をこんな風に評するのはおかしいとお思いでしょうが、そう思っていた方が気持ちは楽ですし、今の貴女には見目麗しい姿形も、鼓膜を震わす美声も、鼻腔をくすぐる芳香も、ましてや凍えた身体を包む温もりも、全ては幻の中の出来事、自分の心をすり抜けて行く一瞬の白昼夢のようにしか感じられないでしょう。

僕に出来る事は何もありません。特別な叡智を授かった訳でもありません。

あまねく勇気をかき集めた訳でも、人をなごませる優れた才能を持つている訳でもありません。

ただ、貴女の心の声を吐き出す事が出来る見ず知らずの他人でしかありません。

僕には人を助ける力はありませんが、哀しい時に哀しいと、うれしい時や楽しい時にうれしい、楽しいと素直に気持ちを伝えられる相手がいる事だけでも心はなごむものだと思います。

特別なアドバイスはできません。思ったまま、感じたままを言葉にして送る事しかできません。

でも、一緒に悲しみ、怒り、喜べたらうれしく思います。

よろしければメールを下さい。」

「あちゃー」

早紀が最初に思った事である。

まず最初に「しこめ」とは、何たる言い草だろうか！確かに万人がアゴを外して振り返るほどの美人ではないかもしれないが、合コンをすれば大概2、3人にはメアドを聞かれるし、街を歩けばオミズ系だけでもスカウトの数は寄ってくる。

つまり、高校の時のクラスで一番かわいい女の子ではないが、人気のあるグループに分類されるタイプであるとの自負は持っている。

「いくらインパクト狙いでもそれはないんじゃないの」と独りごちながら、しかしハタと気がついて見れば、どうにもそのメールが気になる。

まず、言葉遣いからして、他のメールとは全然違っている。

もともと漢字は苦手科目というほどでは無かったし、短大の時に友達に無理矢理つき合わされた漢検はどういう訳か2級に合格してしまった。

だから普通に醜女をしこめと読めたのだが、今どき普通の会話には絶対に出てこない言葉である。言い回しを考えても内容から見ても、結構いい歳いったオジサンかしら？と考えるに足る文章である。

内容を吟味してみても「うっ、くさい！」としか思えない。そも、言い回しが無理矢理的にというか、文学的狙いが全く的是はずれというか…。

「特別な叡智？、あまねく勇氣？」

なに、それ〜?!

やっぱインパクト勝負？

いやいや、待てよ。最悪、新手の宗教？言葉巧みに人の弱みを聞き出して後からアレコレ変な御利益とか厄除けとか称して、「幻の飛龍の革で作った財布」やら「古代ムー大陸の遺跡から出土した石をはめ込んだブレスレット」やらを法外な値段で売り付けるインチキ宗教の手先かしら？

そもそも、悪友の祐子の馬鹿な誘いに乗ったのがイケなかったのだと、改めて早紀は思った。

最近元気がない早紀を励まそうと思ってか、祐子は昨日会社帰りの喫茶店で言ったのだった。

「あのさ、早紀。いつべん出会い系サイトにプロフィール載せてみたら？」

「出会い系？何言ってるの？そんなんで、普通の男に出会える訳ないし、別に今は新しい恋をしたいと思ってる訳じゃないし、そもそも怖いじゃん！」

「恋もうしないの？あのね、早紀。別に出会い系で男漁りしろって言ってるんじゃないんだよ。ただ、色んな人と手っ取り早く話せるよ。それに、下心丸見えだったら途中でシカトしちゃえば、全然平気じゃん。」

「でも、アドレスとか教えるんでしょ？嫌じゃない？」

「平気だよ。アドレスはサイトを通じてよっぽど信頼出来ていいと思わなければ教えなきゃいいし、サイトの登録だってフリーメールで出来るんだよ。だから、誰にもこっちの身許も分かんないよ。」

たいして興味が沸いた訳でもないけど、なんとなく祐子に言いくるめられて、ついやってみる事になったのである。

昨日の夜はそれからが大変だった。

まずはフリーメールを取得するのはたいして問題はなかった。

その後、出会い系を探すのが本当に一苦労だった。

インターネットで探すと、あるわあるわ、まるで日本人全員が自分専用の出会い系サイトを持つてるんじゃないかと思う位いっぱいあった。

その中から信頼出来そうで料金のかからないものを探そうと思ったのだけれども、これが非常に困難を極めた。

色んな書き込みや評価を見ると、どれも「即ヤリ」やら「おいしい思い」やら「その日のうちに…」などというセリフが並んでる。

たまに、「真剣に相手を探してる人を応援するサイト」なんて書いてあっても、その名前で検索すると、やっぱり「即ヤリ」みたいな体験談を書いてる文章が見つかる。

こんなサイトを作ってる奴も、これにメールする男も女も、みんな大馬鹿野郎だ！と思いつながら、早紀は途中からかなり投げやりに、それでも一応コンセプトはまじめな出会いを謳ってるサイトに登録した。

とりあえず祐子と約束した以上、仁義は切っておこう。その上で、帰ってきた馬鹿メールを見せてきっぱりやめればいいわと思ったのである。

そんな次第だから、自分の一言プロフィールも、ああでもないと考えているうちに、ついつい自分の本心だけを一言載せてしまったのである。

「死にたい位寂しい。」と。

## 第二話

反響はまちまちだった。

一番多いのは、「僕が慰めてあげます。会えば絶対楽しませます。」  
というごく普通のメール。

後は「死ぬ前にやろうぜ」なんていう不躰なものや「その気持ち解りますよ。実は僕も…」みたいな共感タイプ、「人生いい事ばかりじゃないから悲観するな」的説教タイプ、最後に「きもい!」「馬鹿!」と言う嫌がらせメールもいっぱいあった。

それにしても、一回プロフィールを載せただけで、こんなにもメールが届く事に早紀は驚いていた。

件のメールも、当然そんなガラクタ箱の中から見つけた。

それにしても、「出会い系」で「出会わない」宣言を最初にしてくるなんて変わった男だ。

一体、出会わなければなにが目的でメールして来たのだろう?残るのはやっぱり金銭目的かな?でも、会うにしても、お金を要求してくるにしても、こちらの身許を知らなければ問題ないか。

「ふん、確かに変なメールね。それにしてもさ、早紀もなんちゅープロフィール載せてるのよ」

全くその通りだと早紀も思った。思ったからこそ、祐子にも見せようか見せまいか散々迷ったのである。

おかげで、今日はかなり寝不足だ。

出会い系に登録したのがおとついで、その日も結局かなり遅い時間

まで起きていたのに、昨日も例のメールを見つけてから、あれこれ考えてたら、あつという間に普段はとつくに夢の中で物語のクライマックスを迎える時間になっていた。

「なんかさ、まじめに書くのも馬鹿みたいだし、なんとなくね。」  
精一杯の強がりだ。

「へー、あつそ！その割りには今日は愛しの課長どのに何回も欠伸すんなよって注意されてたようだけど？」  
「するどい！さすがに悪友！」

ただ、今日寝不足なのは例のメールのせいで、自分のプロフィールのせいではない。

いや、変なプロフィールを載せちゃったから、祐子に見せようか見せまいか迷ったせいでもあるから、半分正解か？

「欠伸なんかしてないもん。でもさ、ほんとと言うとやっぱ少しだけあのメール気になるんだよね。」

「だったら、返信してみたら？メールのやりとりしてるうちに、だんだん目的が解ってくるんじゃない？どうせ早紀にすぐ恋愛しろって言ったって無理だろうし、だったらその男の本性を探るミステリーでいいんじゃない？飽きたら返事しなきゃいいし。」

「なんか、それも悪くない？」

「あのね。早紀はさ、変なとこまじめすぎるんだよ。最初出会い系なんかに登録する男は最低なんて言ってたのは誰なの？向こうも割り切ってるんだから、いちいちそんな事気にしてたら身が持たないよ。」

「そうかな？じゃあ、気が向いたらしてみよ。」と答えながら、早紀はなんとなく自分に対する免罪符を祐子からもらったような感覚になった。多分、祐子もそんな早紀の気持ちを知って、ああいう風に言ってくれたのだろう。

その後も、たわいのない話を色々しながら女二人で金曜の夜を満喫

し、早紀が自宅の駅に降り立ったのは、夜もだいぶ更けてからだ  
た。

二日続いた寝不足とお酒の酔いもあって、その日は久しぶりにぐっ  
すり眠ろうと、家に着いてから急いでお風呂に入り、髪を乾かして、  
歯磨きをする時に、ふと今はもう使われなくなって久しい歯ブラシ  
に目がいった。

最近は慣れたせいかな、あまり気にも止めてなかったのに。  
こんな物を後生大事に取っておくなんてどうかしてる。

でも、昔あの人部屋中歩き回りながら歯磨きをしていた姿を思い  
出すと、どうしても捨て切れずに今も早紀の歯ブラシとおそろいで  
歯ブラシたてに並んだままにしてあった物だ。

かさ張る物じゃないし、それに他の物は彼があらかた持って行って  
しまったから、今では早紀の部屋に彼の名残を感じさせるものはほ  
とんど残っていない。

きつと自然に捨てられる日が来るよね。

その日までは置いてあげましょ、歯ブラシさん。

なんて言っちゃって、この歯ブラシは二人でソニプラへ買い物に行っ  
た時におそろいでそろえたんだから。

私の歯ブラシはそれから何回かわわっちゃったけどね。

気にしないようにしようと、布団に潜り込んでも、歯ブラシをきっ  
かけに彼との日々を思い出すとさっきまでの眠気が嘘のようにどこ  
かに行ってしまった。

やっぱり、寂しいな。

もしかしたら、このままずっと一人で年を取っていくのかなと思う  
と、思わず泣きそうになる。

祐子にメールでもしようかな？もう寝てるかな？などと考えながら、  
ふと例のメールを思い出した。返事してみようかな。変な感じの人

だったら、やめればいいしね。祐子に話す材料にもなるかな。

「お返事ありがとう。」

でも、残念ながら、あなたはブ男かもしれないけど、私は醜女じゃありませんよ。

それに、今どきしこめなんて言葉使わないんだから。

まあ、いいわ。それにしても、最初から会いません宣言するなんて変わった人ですね。

私はプロフィールに書いたけど祐子だからユウってみんなに呼ばれてるけど（祐子ごめん！）あなたの事はなんて呼べばいいですか？プロフィールどおり及川さん？

趣味とかありますか？

なにか楽しい趣味とかあれば教えてください。」

一体なにをしてるんだろう？

まるで、私の方が会いましょう、あなたに興味がありますって書いてるようなものだわ。

本当に馬鹿。

寝不足にも関わらず、早紀が眠りに落ちたのは空がぼんやりと明るくなっただけだった。

昼過ぎに起きて、今日はなにをしようかな？明るく頑張るぞ！と考えながら、そういえば返信来てるかな？いくらなんでも、もう来てたらキシヨイよね。とメールをチェックしてみると、はたして返信が来ていた。

「お返事ありがとう。」

まず最初に容姿の件についてはすいません。

僕の方は訂正の必要はありませんが、ユウさんは違うようですね。でも、言い訳すれば最初から本気で醜女だと思ってた訳じゃありません。

ただ、とても寂しそうだったから、褒められるより、時には、無関心でいられた方が気楽な場合もあるかと思っただんです。

僕の事は及川でも伸二でもいいですし、友達からはシンって呼ばれてるので、それでもいいですよ。

なんか適当なあだ名をつけてくれてもいいですよ。

趣味は色々あります。

スポーツは好きで、特にサッカーが好きです。ドライブや映画を観るのも、本を読んだり、音楽を聴くのも好きです。特に変わった趣味を持つてる訳じゃないので、そんなに面白い話は出来ないかもしれませんが、もし興味があれば、お話しますよ。

でもね、ユウさん。趣味を楽しむのも、自分がリラックスしてないと難しいですよ。

無理して楽しく振る舞っても余計に辛くなる時もあると思いますよ。そういう僕も感情のブレは大きいかもしれません。すごく辛くなる時があります。

そんな時は、ジタバタしてます。車に乗ったり、大声で歌ったり、逆に何時間もジーと考え込んだり。

もちろんお酒に逃げる時もよくあります。

つまり、思いついたまま行動してます。

その後に、ああ楽しかったといった爽快感はありません。

ひたすら、自分に潰されないように葛藤しているだけです。

とても弱い人間ですから。

でも、人はみんな弱いものだと思いますか？

誰だって、他人には見せられない弱い面を持つてると思いませんか？

そんな時に、自分の本心を話したり、ただ感じたままを言い合ったり出来る他人が一人位いてもいいかなと思うんです。他人になら、気兼ねなく言える事もあると思うんです。だからユウさんには会いません。ユウさんのプライバシーも聞きません。もし良かったら、またメールください。」

## 第三話

とても不思議な気分だった。

及川が送ってきたメールに完全に納得した訳ではなかった。

でも、頭から否定する理由もなかったし、それ以上に早紀は自分がほんの少し安らいでいるのを感じた。

喻えて言うならば、暖かな木漏れ日がさす午後空いた鈍行列車でつい微睡んでしまうような感覚だ。

完全に無防備な状態になる訳にはいかないけれど、つい心地良くてもう少しぼんやりとしていたくなる。

幸い今日は土曜日で仕事もないし、残念ながら約束もない。

お湯を沸かしながらティーカップとストロベリージャムを用意して、たまには英国風の洒落たランチも粋なものよね、なんてちよつとだけ自分におどけて見せた。

スコーンはないけどね。

それに紅茶もスーパで買ったティーバックだけど、ジャムだけは会社の後輩のお土産だ。

残念ながらそのジャムにしても埼玉産の軽井沢土産という、ポリシ―もアイデンティティもないものだが、そんなものは気にしなけりゃなんてことはない。

そもそも早紀には紅茶にジャムを入れる風習なんてないのだ。

もともと早紀にとってのジャムはパンに塗るか、せいぜいがヨーグルトに入れるくらいの物なのだから。

結局、ストロベリージャム入りの妙にあまつたるい紅茶とスコーンがわりのクッキーを3枚食べて完全に口の中が糖分で麻痺したころに、ようやく頭も冴え初めて週末の予定をどうしようかな？などと考え初めていた。

信じられない事だが、週末の予定を自分で考えるのは実に久しぶりのような気がした。

最近友人達から誘われれば出かけたりしていたが、それも自発的にというよりは、早紀の事を心配した友達達が、なにかしら用事や口実をつけて誘ってくれていたものだ。

もちろん、そんな外出であっても、友達と遊んでいる時はそれなりに楽しんではいたが、自分から積極的に行動する事はしばらくなかった気がする。

そう、あの日から…。

まだ、なにも話した訳でもないのに、なぜあんなメールが来ただけでそんな風に思ったのだろう。

おそらくは、あの言葉は自分だけに向けられたものだから。

私の事を全く知らない他人が仕事の関係や女の子のおしの変な仲間意識や、とにかく自分以外の他人も介在している関係の中で送ってきたものではないから。

そう考えると、何故だか不思議に安心できた。

なにを書いてても、なにを言われても気にしなくていい。

意見が合わなければ、全ては冗談でした。と言って終わらせる事の出来る関係。

そして、なによりも、もう傷ついたり、傷つけたりしなくていい関係。

「シンさん、こんにちは。」

勝手にシンさんと呼ぶ事にしました。

メール返信早いですね。

一体シンさんは、なにをしてる人なんでしょうね？

それにしても、最初のメールも2回目も、完全に私が落ち込んで、この世の中に嫌気がさした女だと思って送っていませんか？

そりゃ、確かに今絶好調じゃないけど、そこまでじゃありませんよ。

最初のプロフィール書いた時はちょっと落ち込んでたけど、それにしても、あれだけで決め付けちゃうのもある意味シンさんって純粹？ 今日明日は休みなので、のんびりしながら、気が向いたら買い物物でも行っ来ようと思います。

シンさんは休みですか？

週末とかはなにしてるの？

なんかこうやって知らない人とメールしてるのもすごく不思議な感じだけど、この前シンさんが言ってた、他人だから思った事をなんでも言えるって少し納得しちゃいました。

会わない前提でって出会い系もおかしいけどね。

シンさんは出会わない出会い系で、なんでメールくれたの？なんか、面白いね。

もしかして、それがテクニクかな？

それなら、かなりすごいけどね。

どっちにしても、しばらくは不思議のシンさんって感じかな？  
それじゃね」

メールを送って気がついた。

確かに気楽に恥ずかしげもなく書いてはいる。

でも、決して心の声なんかじゃない。

どうでもいい、内容のない話だ。

一体自分はなにを期待していたのだろう。

もう・・・、これでメール止めようかな？

さっき、シンからの返信を読んで、曇天の空模様からほんの少しだけ太陽の陽射しが見えたかのような気分になったのに、また明かりは厚い雲に覆われてしまった。

一体、こんな感情の浮き沈みがいつ迄続くのだろう。

結局早紀がシンからの返信を見たのは日曜の夜、明日からまた一週間が始まるという時になってからだった。

## 第四話

「ユウさん、こんにちは。  
僕も今日明日は休みです。

しがないサラリーマンをやってます。そんなに謎多き男じゃありませんよ。

この休みはユウさんと同じでやっぱりのんびりしています。

ところで、出会い系で出会いを求めないなんて、おかしいって書いてあるけど、逆にユウさんは出会いを求めてましたか？

おそらくは、ついなんとなくとか、友達に無理矢理付き合わされて、といった所じゃないでしょうか？

僕の場合は友人がパソコンでアクセスしているのをなんとなく横から見ていたらユウさんのプロフィールが目飛び込んで来たのです。数多ある女性のプロフィールの中でユウさんの文章だけが震えてました。

たった数文字なのに、その一語一語が

「私は、ここにいますよ。でも、一番伝えたい相手にはその言葉は届かないよ。」

って、泣いていました。

だから、急いでメールを送りました。

もし、僕の考えている事が全般的はずれなら、すいません。でも、そうであるなら、うれしい気持ちもします。

それなら僕の勝手な一人相撲なのだから…。

本当は今、哀しくないのならその方がいいのだから…。

会わないと言ったのも、そういう思い込みがあるからです。

僕に出来るのは、会って一緒に楽しく遊ぶ事ではなく、ただ話を聞いて、感じたままを送り返す事だけだから。

もし、僕が考えている事が間違っているのだとしたら、それは逆にいい事だと思います。

変なメールが来てユウさんも戸惑ったでしょう。

でも、もしそうではないならば…、そして、もしまた気が向く時が来るのであればメールをください。

それでは、また。」

2回読み直してみて、ふうー、と大きな溜め息を吐きながら、気がついたら頬に一滴暖かいものが流れていた。

きつとこの人は本当に会うつもりはないんだな、とはっきりわかった。

それと同時に、この人には本当に思った事を話しても大丈夫だなとも思った。

もう、疑うのはやめてみよう。

素直に自分の心の中を吐露してみよう。

なんの対価を求めるのでもなく、メールをしたいと思った時に、送りたいと思った事を書いてみよう。

すぐにでも返信をしたいという気持ちと、今自分が感じている暖かいぬくもりをもう少しそのまま味わったまま眠りにつきたいという気持ちを抱えながらいつの間にか早紀は安らかに眠りに落ちていた。

爽やかな朝だった。

久しぶりに携帯の目覚ましより早起きして窓を開ければ、もうすっかり春の陽気になった軽い空気が早紀の頬を優しく撫でてくれた。早く返信したいなと思いつながら、一方で思っている事を落ち着いて

ゆっくり書きたいなという気持ちもあり、結局一言だけ返信をしてみた。

「シンさん、おはようございます。  
また、夜にメールしますね。」

「おっはよ〜、早紀ちゃん。  
な〜んか、楽しそうな顔してるね。」

「おはよ、理絵。別に普通だよ。」  
「うそ、うそ！」

今日の合コンがんばろーね！」

「合コン？あ、忘れてた！」

今日は理絵から声をかけられて、早紀と祐子ともう一人同じ課の恵美と四人で合コンに行く事になっていたのだ。

早紀と祐子は同期だが、実は理絵と恵美は一つ後輩だ。

しかし、もともと今早紀がいる課には女性が少ない事もあり、後輩というよりは完全に友達みたいな付き合いだ。

それでも、やはり三人に対する感覚は少しずつ違うものだし、今日も祐子が、早紀が行かないなら自分も行かないと言い出さなければ、本当は断りたかったのだ。

今日は月曜だし、まだ合コンを楽しもうという気分じゃないし、恵美は正直に言えば少し苦手だ。

すっかり忘れていたせいで、洋服もいつも通りのスーツだし、今はなにより早く帰って返信をしたいのに。

さすがに、当日になってからのドタキャンも出来ないのです、とにかく適当にやり過ごして早く家に帰ろう。

だいたい祐子も祐子だ。なぜ、金曜に一言くらい言ってくれないのだ。

と自分が忘れたのを棚上げにして内心ちよつと毒づいた。  
約束したのなんて、もう一月近く前なんだし、祐子が無理矢理早紀を引きずりこんだようなものなのに…。

そんな気分だったから、はたして、合コンは早紀にとっては全く面白くないものだった。

今日の相手は一部上場の商社マンとかで、なんとなく全員エリート意識が透けて見えていたし、話してくる内容も、流行のスポットやら、海外出張に行った時の武勇伝だか失敗談だか解らないような話やら、拳句には聞いてもいないのに過去の女性遍歴だ。

正直に言えば早紀はあまり合コンが得意ではない。もともと多少人見知りするし、落ち着いて話す分にはまだ平気なのだが、今日みたいに相手が全員エンジン全快のハイテンションで目をキラキラさせながら捲し立てられると完全に引いてしまう。

恵美は「さすが、みなさん遊びなれて楽しいですね。」  
なんて言いながら、しなを作っている。

恵美のそんな風に自然に男に媚びを売る所が、やはり好きにはなれない。

祐子は、早紀の様子を見ながら、目でごめんねとあやまって来たから、トイレに行った時に二人で一次会で早々に帰る事にした。

それでも時刻は9時を回っていたのに、恵美は「え、もう帰っちゃうの？カラオケでも行こうよ！」なんて言っていた。

実際お店を出てから帰りの方向も違うから祐子と二人で、さっさと帰って来てしまったけど、恵美と理絵はもしかしたらあの後でカラオケにでも行ったのかもしれない。

早紀は、とにかく早く家に帰って落ち着いてからメールしようとは  
かり考えていた。

まだ、3、4通しかしていないメール交換なのに、少しずつメールをするのが、いやそれよりもシンからどんな返信が来るのかを楽しみにしている自分があるのを、意識しながら家路を急いだ。

## 第五話

「シンさん、こんばんは。」

本当は、もっと早くにメールしたかったんですけど、実は今日…。

合コンしてきましたんです。

びっくりしました？

シンさんは、私の事を、完全に落ち込んでる女の娘だと思ってるよ  
うだから、合コンなんて、びっくりでしょ？

でもね…、正直に言えば、つまらなかったです。

相手は、多分シンさんも聞いた事のある、某一部上場企業の商社マ  
ンだったんだけど、なんか相手の人達には悪いけど、ちっとも面白  
くなかったです。

多分、相手の人達は盛り上げようとしてくれたんだと思うんだけど、  
逆に引いちゃいました。

本当の事を言えば、今日は全然行きたくなかったの。

友達がどうしてもって言うから、なんとなく付き合っただけで、  
そんな気持ちで行ったって、面白い訳ないですよね。

それに、相手の人達にも失礼ですよね。

こんな事でいいのかな、とも思うけど、やっぱり、自分から色々楽  
しめるようになるまで、無理にはしゃべろうとしてもダメですよね。

友達は私の事を心配して、色々と声をかけてくれるのは解ってるんだけどね。

実は、シンさんの言っていた通りなんです。

私、少し前に失恋をしました。

なんか、あまりにもありきたりで、笑っちゃうでしょ？

それとも、もしかしてあきれちゃったかな？

シンさんは、私のメールを見て、色々考えてくれたんですよ？

どんな悩みだと思ってましたか？

ほんと、馬鹿ですよ。いつまでも失恋した傷をひきずっていても、何も解決しないって、思っではいるんだ。

だけどね…。

やっぱり、本当に好きだったんです。

これから先、また同じように思える人と巡り会える自信がないんです。

こんな事、シンさんに言っても、しょうがないですよ。

少し、酔ってるみたいです。

変なメール、ごめんなさい。

今日は、もう寝ます。

気が向いたら、返事ください。

おやすみなさい。」

本当に、少し酔っているようだ。

早紀は、ベットに横になりながら、自分のメールを見返してみてもう思った。

もう、思った事をそのまま送信しようと決心したのに、いざメールにしてみると、全く上手に気持ちを表現出来ない事に気がついた。

こんな文章を送って、いったいシンさんはどう思うだろう？

送信ボタンを押す早紀の指先も心なしか少しためらっているようだった。

「ユウさん、こんばんは。  
メール、ありがとう。」

辛い恋をしたんですね。  
ちっともおかしくなんかありませんよ。

それは、おそらく世界中の人達が、思い煩い、心うちひしがれて、胸を焦がす事ですから。

誰にだって経験はあると思いますよ。

人として生まれた以上、全ての者が一度や二度は通らなければいけないイバラの道だから。

そして、解決できる方法も、人それぞれ、十人十色だと思いますよ。

合コンはつまらなかったですか？

でもね、つまらないかもしれないって思ってるのと、実際行ってみてつまらなかったのは、少し違う気がしますよ。

それが解っただけでも一歩前進って思いましょよ。

今のユウさんの心の中には、まだまだ彼の記憶がいっぱいだという事ですよ。

これは、僕の勝手な考え方なんですけど、人の心の中のキャパシティは、ある程度決まってると思うんです。

一人の人を好きになると、その分だけ他の思いが少しづつ心から溢れていくと思うんです。

もちろん、記憶には残ってますよ。

だけど、直接感情を揺さぶる、魂を震わせるような熱い思いは、そんなに量が増えるものじゃないと思います。

だから、あせらなくていいんじゃないですか？

彼の事も無理に忘れようとしなくてもいいと思いますよ。

辛かったら、たまには、辛いよと泣いてみる事も必要だと思いますよ。

ユウさん。彼のように愛せる人が今後現れるか不安だと言ってますね。

でもね、彼のように愛せる人は、これからもう現れませんよ。

だって、ユウさんはユウさんでしかないように、彼は他の誰でもないんですから。

でも、全然違った愛し方が出来る人は現れると思いますよ。

比べてもしょうがないと思いませんか？

比べる事なんか、出来ないと思いませんか？

きっと、いつか心から愛せる人が現れますよ。

そして、自然に今の思いが、記憶というものに形を変えて心から溢れていくと思いますよ。

ユウさん。きっと大丈夫です。

誰だって、深い傷を負ったら、すぐには立ち上がれませんよ。

擦り傷や打ち身なら二、三日で治るかもしれませんが。

でも、打撲や捻挫はもっと時間がかかるでしょ？

ましてや、骨折ならそれこそ、何か月もかかりますよね。

その間は安静にしている時間も必要ですし、手術をする場合だってあります。

リハビリが必要な時もあるでしょう。

心だって、きっと同じですよ。

安静もリハビリも必要なんです。

ユウさん、きっと大丈夫！

だって、前の彼だって生まれた時から彼だった訳じゃないんだもの。

どこかで、なんかのきっかけで、ユウさんと知り合ったんですよね？

だったら、なんの心配もいらないじゃないですか？

きっと、またすばらしい出会いがありますよ。

大丈夫ですよ、ユウさん。

なんか、だいぶ長いメールになってしまいましたね。

それに、随分説教くさいですね。

すいません。

でも、僕が思った事を、思い付くままに文章にしたら、こうなっちゃいました。

僕もそろそろ寝ようと思います。

それではユウさん、おやすみなさい。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6636d/>

---

めえる

2010年10月26日06時19分発行